

危機的状況に現れる「真の顔」

—第二次大戦末期のドイツ社会・国防軍をめぐる近年の研究から

小野寺拓也

はじめに

「政治指導者とその体制の本質をなによりも如実に物語るのは、その没落の様態だ（A・ビーヴァー）」¹。

地下壕の中で破滅していく、ヒトラーやゲッベルス、その他のナチ体制の指導者たちを描いた映画「ヒトラー 最期の12日間」(2004)が放つ吸引力を、この一文以上に的確に表現することは難しい。ナチ体制・運動に当初から内在していた破壊への衝動やニヒリズム、指導者たちの現実感覚の喪失や狂信性が、第二次大戦末期の地下要塞の中でのグロテスクなエピソードの数々に、端的に集約されているように感じられるからである²。

近年、特に21世紀に入ってから、大戦末期という時期が研究の上でも注目を集めるようになった最大の理由も、まさにこの点にある。周知のようにナチ体制は大戦末期、敗色が濃厚であるにもかかわらず、首都ベルリンが陥落するまで決して内部崩壊することはなかった。「43年以降45年までの間にさまざまな崩壊現象がありながら、また最終局面で連合国が国土の5分の4までも占領した後でさえも、なお第三帝国の体制は固いつづけたのはなぜか」³（永岑三千輝）。国防軍兵士たちはなぜ1918年のように反乱や暴動、あるいは集団脱走・投降をすることなく最後まで戦い続け、あるいは少なくとも持ちこたえたのか。即決裁判やゲシュタポなどによる「内向きの暴力」の急進化、プロパガンダによる教化や戦時動員強化など、「上から」の強制だけでこれらは説明がつかうことなのか。むしろ、1943年までがそうであるように、「強制と同意」の間の中でナチ体制や社会のあり方を捉えることが必要なのではないか。

こうした問いを通じて、大戦末期を極限状態の中に現れた例外的な状況と見なすのではなく、「強制と同意」、暴力性と自己動員のいずれもがむき出しな形で現れるこの時期に、ナチ体制と社会の本質、「真の顔（D・バーゲン）」⁴を見出そうとする傾向が近年強まっているように感じられる。これは90年代以降のナチズム研究の潮流、すなわちホロコーストや絶滅戦争、総力戦体制こそがナチ体制に内在する暴力性の顕在化であり、戦時をナチズム研究の中心に据えるべきだというコンセンサス⁵、そして人々のナチ体制への同意・協力を重視する流れ⁶の延長線上にあるものでもある。

しかし永岑三千輝も2003年に指摘しているように⁷、こうした研究は国際的にも端緒についたばかりである。終戦60年である2005年を前後して、大戦末期のドイツ社会・国防軍に関する研究書や論文集が少なからず出版され、研究蓄積は幾分厚みを増したが、この時期の全体像を描くには依然十分とは言えず、この時期に関する動向論文もほとんど存在しない⁸。本稿はそうした研究の現状を踏まえ、この時期を論じることにどのような意味があるのか、そして既存の研究ではどのような論点が提示されているのかを整理

することで、今後の第二次大戦末期研究の射程を見極めようとする、一つの試論である。

本稿では、①総力戦体制・ポリクラシー論、②ナチ党・国防軍の関係、③ナチ体制における「イデオロギー」の意味、④暴力の社会化、という四つの視点から整理する。

1 総力戦体制・ポリクラシー論

スターリングラード戦敗北後の1943年2月18日、ベルリン・スポーツ宮殿で有名な「総力戦演説」を行い、人的資源の徹底的動員や政府の合理化などを呼びかけたゲッペルスは翌年7月25日に、念願の「総力戦全権」に任命された。前線での人員不足が深刻化する中で、鉄道・郵便や公共施設の職員、軍需産業の労働者など、戦争遂行に不可欠とされてきた職場(uk-Stellungen)から可能な限り「余剰人員」をかき集めるほか、女性や青少年を高射砲部隊の援護や軍隊内での事務作業、塹壕掘りなど補助的な労働へと動員することで、こうした仕事に従事していた男性を前線へと送り込む必要に迫られていた。空襲被害に対する迅速な対応、疎開・避難の推進、軍需生産の拡大と労働動員の強化、ドイツ国内の防衛体制の整備など、絶望的な戦況の中なおも戦い続ける大戦末期のナチ体制は、あらゆる面において、効率的な総力戦体制を必要としていた。

しかしここで問題となるのが、ポリクラシーというナチ体制の基本的性格である。ヒトラーへの個人的忠誠を基軸とするカリスマ支配原則に基づいて、権限や管轄が不明瞭な「総監 Generalinspekteur」「国家委員 Reichskommissar」「特別全権 Sonderbevollmächtigte」といった、特別の権限を有する指導者が次々任命された。組織が乱立し、それぞれがバラバラに命令や決定を行うことで、行政としての一体性が損なわれる一方既存の官僚・党組織との齟齬・軋轢や、指導者・組織間の管轄争いが激化するリスクが常に存在した。従って、「職権をめぐるカオス Ämterchaos」が生まれるのはナチ体制の組織原理からして必然だったのであり、その末路としては「自らの破壊のダイナミクス」に屈する他あり得なかったのだ、とする研究者は少なくない⁹。

ナチ体制下のポリクラシーのもう一つ重要な特徴は、指導者たちが次々と新たな権限を獲得、兼任していくことで権力を集積させていくことであり、この傾向は大戦末期により顕著なものとなる。ゲッペルスが、ベルリン大管区指導者、宣伝省大臣、「民間空襲対応措置に関する国家監督局 Reichsinspektion der zivilen Luftkriegsmaßnahmen」長(1943.12-44.8)という既に獲得していた地位に加え、「総力戦全権」としての権限を兼任したことが、その端的な例である¹⁰。こうした社会ダーウィニズム的な、「ネオ封建主義(R・ケール)」¹¹とも言える群雄割拠状態では、集権的で効率的な総動員体制の遂行など、不可能であるように一見感じられる。

こうした「ポリクラシー＝カオス、あるいは非効率的」という従来のテーゼは、国家レベルの行政レベルの分析に基づくものであるが、大管区や都市・ゲマインデなど中下位レベルの行政機構に着目する近年の研究からは、これとは対照的なナチ体制像が見えてくる。ナチ体制当初は不安定要因であった大管区指導者も、戦時中に国家防衛委員(Reichsverteidigungskommissare)としての、あるいは労働配置総監(Generalbevollmächtigte für den Arbeitseinsatz)、国家住宅委員(Reichswohnungskommissar)関連の権限を次々と集積させることで、様々な政策領域を包括的にコーディネートする、安定化作用を果たすことになった。権限が曖昧であるということは、中下位レベルの行政組織において

は必ずしも混乱や非効率性と同意ではなく、むしろ裁量や行動の余地が大きいということをも意味した。「トップレベルにおいては、うんざりするほどよく知られているようなカオスが支配的であったのに対し、執行機関は、数々の機関が発する数々の規則・指令・ガイドラインの中から、自分たちにとって都合の良いものを選び出すことができた」(B・ゴットー)からである¹²。大管区指導者たちは定期的に会合を開いて、相互にコンセンサスを形成していった。市町村長たちも「ドイツ市町村連絡協議会 Deutscher Gemeindegtag」に集って、空襲被害への対応など焦眉の問題について情報交換に努めたほか、ナチ党の管区指導者(Kreisleiter)や地域の大物党员、経済界の代表などとも積極的に連携していった。人手不足に苦しむ市長たちは、大管区指導者の人脈を活用することで、空襲被害への救援活動、瓦礫の除去、遺体の埋葬、不発弾の処理などで強制収容所の囚人を労働力として調達した¹³。また、ゲマインデ・レベルに設置された特別機関の下部組織、たとえば「四ヶ年計画全権」の都市代表の場合には、中央の意向を受けて都市行政に介入するというよりは、むしろ都市の利害を代弁してベルリン中央へと掛け合い、物資不足が深刻となる中で「追加割り当て」を何とかして獲得するなど、いわば都市行政のロビイストと化す場合もあった¹⁴。

大管区やゲマインデがこのように、組織ではなく人的結合を基本原理とするポリクラシーを逆手にとる形で、様々なネットワークを構築し、無数の折衝・妥協を重ねることで自らの利害を確保・防衛していったことは、ポリクラシーが決して混乱と非効率性、自己崩壊を必然的に招いたわけではなく、むしろ現場における行動・裁量の余地を広げ、「驚くべき動員能力」や「高い安定性」を生み得たことをも示している。空襲によって行政組織も大きなダメージを受け、より少ない人員で危機管理に対応することを迫られたが、様々な点で限界に直面しつつも、臨機応変な対応で大戦末期までそれなりの機能を果たし続け、空襲に苦しむ人々に対して「連続性と安定性という支え」を提供し得た¹⁵。しかしこうした効率性は、中下位レベルの行政組織で働く人々が、ナチ体制の国家レベルでの政策と、大枠では目標を共有していたがゆえに初めて可能となったものでもあった。基本的なコンセンサスが存在してはじめて、中下位レベルの行政機構に存在した裁量の余地は一つの方向性へと収斂し、カオスや崩壊を避けることができた。B・ゴットーが指摘するように、ドイツ社会を強力的に統合するナチ・イデオロギーや「民族共同体」観念、ナチ体制において官吏には何が求められているかという暗黙の共通認識なくして、こうした効率性は不可能であった¹⁶。

2 ナチ党・国防軍の関係

もう一点、大戦末期の総力戦体制・ポリクラシー論で争点になっているのが、ナチ党と国防軍の権力関係である。従来主張されてきたテーゼは、大戦末期、特に7月20日事件で国防軍将校が多数ヒトラー暗殺未遂に関与していたことをきっかけとして、ヒトラーやナチ党の中で鬱積していた国防軍への不信感が頂点に達し、以後国防軍はかすかに保持していた自立性を完全に失って、ナチ党によって蚕食されるがまらになっていった、というものである¹⁷。こうした流れの中で通常捉えられるのが、①ナチ指導将校(Nationalsozialistischer Führungsoffizier・NSFO)による国防軍内部でのイデオロギー教化、②国内予備軍司令官へのヒムラー任命、③「国民突撃隊」の結成である。

①は1943年末に、総統命令によって組織として立ち上げられた。連合国に対する軍事的劣勢を「世界観という武器」によって埋め合わせるため、まずは国防軍の主軸となる将校たち、そして最終的には国防軍兵士全体を「国民社会主義的思想」へと教化し、ファナティックに闘い続ける兵士を創り出そうとする試みであった。兵士の教化は従来国防軍が自ら担当していたが、この「ナチ指導将校」はボルマン率いる党官房が教化に介入するという点で、国防軍の「自律性」に対する決定的な打撃であった。具体的には、「無条件の国民社会主義者であること」「抜きんできた前線経験の持ち主であること」「政治的・世界観的指導や教育に経験や能力があること」といった条件によって1,200人程度の将校を専任NSFOとして選別し、師団レベルまでの各司令部に配属した。

7月20日事件以降、伝統的な軍隊式敬礼にかわって右手を斜めに掲げる「ドイツ礼」が導入されたり、伝統的な部隊旗にかわってナチ旗が使われるなど、シンボルの面でも軍へのナチ党の浸食は明白であったが、この流れが決定的となったのが、②をはじめとするヒムラーへの権限集積である。国内予備軍司令官の他、陸軍兵器局長、国民擲弾兵(Volksgrenadier)師団総司令官(のち、ヴァイクセル軍集団司令官も)を兼任して、警察・親衛隊というそもそもの権力基盤、さらに内務大臣としての権限だけでなく、国防軍・軍需生産の領域でも莫大な権力を手にすることになった。また、武装親衛隊と国防軍の融合も、かつてなく進行することになる。

③の「国民突撃隊」は、44年9月にボルマン主導のもと総統命令によって設立された、16歳から60歳までの「兵役に耐えうるすべての男性」を対象とした、民兵組織である。ドイツ本国を「あらゆる武器や手段」によって防衛し、国防軍を援護することが目的であったが、編成や指揮は党大管区指導者、ガイドラインの指令は党官房長のボルマン、訓練や武器供給は国内予備軍司令官のヒムラーというふうに、戦闘時以外には基本的に党の指揮系統に属する組織であった。しかし、この組織の目的は軍事面よりもむしろ、60万人に及ぶ「銃後」の人々をイデオロギー的に「狂信化」させ、ドイツ人を精神的・心理的に動員しようとする点にあった。すなわち、全ドイツ人が抵抗の意志を明確に示すことで、「ドイツ本国に侵攻すれば、多大な損失は避けられない」という印象を敵に与える一方、ドイツ人に共同体感覚や犠牲精神を共有させ、「ドイツ民族」やナチ体制に対する忠誠を確保しようとしたのである¹⁸。

以上のように大戦末期の動向を概観すると、ナチ党が物理的にも精神的にも総動員を進めていく過程で国防軍への不信感を露わにし、その権限を吸収・篡奪していくという、一方向的な流れのように確かに見える。しかしその際忘れてはいけないのは、両者は対立関係にあってだけでなく、協力・役割分担という関係にもあったという点である。

①のNSFOに関しては、国防軍内部ですでに「国防精神指導 Wehrgeistige Führung」の名の下に、忠誠や服従、戦友意識、義務、祖国愛などの他に、敵を絶滅する意志や憎悪、耐え抜く意志などを兵士たちに指導する、NSFOが行う教化と内容のさほど変わらない政治教育が行われており、強い抵抗は見られなかった。J・フェルスターが指摘するように、それまでは部隊ごとにバラバラに行われていた政治教育を組織的・画一的に行うところにNSFOの本質があり、決して「党官房による革命的行動」と呼べるようなものではなかった¹⁹。③に関しても、後方地域で陣地を構築してこれを守ったり、あるいは治安を維持するための人員をなかなか割くことができない国防軍が、こう

した民兵組織の設立をヒトラーに掛け合ったことが、その成立の背景にあった。両者とも「軍事的目標のために、ドイツ社会を可能な限り全面的に動員する」という目標で完全に一致しており、党が人員かき集めに専念することで、軍は戦闘に専念できるという役割分担が事実上成立していた。M・メッサーシュミットの古典的研究以来、ナチ党と国防軍の間の「目標的部分的一致」はつとに指摘されているところであるが²⁰、大戦末期に関しては、軍と党という二項対立的な観点がいまだに支配的であり、両者の一致・協力という視点からの研究が、今後進められる必要があろう。

3 ナチ体制における「イデオロギー」

大戦末期は、すでに見たNSFOに端的に表れているように、イデオロギーが体制にとって持つ意味合いがきわめて大きくなったという意味で、意図派の解釈に比較的適合的な時期であると言える²¹。しかし、ここで言う「イデオロギー」がどのようなものであるのかを正確に見極めるためには、①ドイツ国民の雰囲気(Stimmung)を味方につけ、あるいは抗戦意欲をかき立てるためにプロパガンダによって広められる、ポジティブな自己イメージ、②たとえナチ体制を積極的に支持しない人々であっても、少なくとも体制に刃向かわせず、現実の行動・態度(Haltung)においては体制に協力し続けるようにさせる、プロパガンダ上の様々な工夫、特にネガティブな敵イメージの宣伝²²、③物質的な劣勢・弱点を、意志の力や確固たる世界観など観念によって克服しようとする、ナチ体制のダイナミズムに内在する思考様式²³、という3つの次元に分けて考える必要がある。この3つはむしろ現実においては分かちがたく絡み合っており、正確に区別することはできないが、大戦末期において「イデオロギー」が重要であったという場合に、誰にとってイデオロギーのどの側面が説得力を持っていたのか、国防軍兵士たちや「銃後の」²⁴「ふつうの人々」にとってこうしたイデオロギーがどの程度重要であったのかを知るためには、こうした区分がどうしても必要になるからである。

A・カリスによれば、大戦末期のナチ・プロパガンダの特徴は、「ポジティブな統合から、ネガティブな統合へ」「長期的・一般的なディスクールから、短期的・状況依存的なディスクールへ」という流れとして要約できる²⁴。相次ぐ軍事的敗北によって、長期的な明るい見通しを国民に提示することが難しくなり、連合国に対する敵愾心や、彼らがドイツ本国へ侵攻してくることへの恐怖を煽ることで、体制支持の如何に関わらず人々の「受動的、もしくは不承不承の忠誠」²⁵を少なくとも取り付けようとした。「こうした忠誠は絶望とオルタナティブの欠如によるものであり、熱狂や自己犠牲に基づくものではなかったが、しかし機能においてそれに劣るものではなかった」²⁶のであり、こうした「恐怖力行Kraft durch Furcht」プロパガンダは実際、かなりの程度成功を収めたと言える。英米軍による空襲は人々の怒りを巻き起こし、「テロ攻撃」「空のテロ」というプロパガンダ用語は、そのまま人々の口の端に上ることがあった。新聞や雑誌では、空襲被害者が受けた困窮状態や苦しみ、そしてそこからの立ち直りが詳しく取り上げられて、人々が共感・一体化できるような語りが提供される一方、「ボルシェヴィキによる残虐行為」が事細かに報じられ、ソ連軍が侵入してきた場合の運命を予感させた²⁷。

他にも、反ユダヤ主義や、ユダヤ人迫害へのドイツ人の罪の意識、大戦末期まで比較的良好に保たれたドイツ国内への物資の供給とそこから生じるナチ体制への共犯感

覚、「退路は断たれた」「最終的勝利を勝ち取るか、もしくは滅びるか」という「運命共同体」的意識、後述する「内向きのテロル」への恐怖など、ドイツ人をナチ体制に最後までつなぎ止めるための「ネガティブな統合」にナチ体制が事欠くことはなかったが、それとは別に、娯楽を通じた「日常性への逃避」という別の回路も、人々には用意されていた。

ゲッベルスが常に気をつけていたように、政治宣伝の過剰は、ナチ体制が必要としていた「民族同胞の統制された自己動員(B・クンドルス)」²⁸にとって、逆効果でしかなかった。ただでさえ人々の負担が大きい戦時下であって、気晴らしを提供し、心理的な負荷を軽くすることなしに、彼らの「自発性」を喚起することは難しかったからである。ゲッベルスは、人々の私的空間への退却を認めることが自らの権力や体制への忠誠を保つためには不可欠であることを認識しており、「集団のために自らを犠牲にする」ことへの代償に個人的な幸福を約束する「魂のマッサージSeelenmassage」としての役割を、メディアが果たさなければならぬと考えていた²⁹。実際、空襲が激化し、軍事的な状況が危機的になって、人々の間で諦念や疲労が広がる中でも、娯楽に対する需要が減ることはなく、むしろ逆に増す一方であった。都市では、コンサートホールや劇場、映画館の前に長蛇の列ができるほどであった。1944年9月にほとんどの劇場やコンサートホール、ナイトクラブが閉鎖されるが、宣伝省はこうした需要を認識して、映画館だけは空襲のさなかにあっても、仮設映画館を設置するなどして守り続けた³⁰。絵入り雑誌においても、戦争の影を微塵も感じさせない「ふつうの人々」の牧歌的な日常生活が写し出され、人々を受動性、現実逃避へと誘導しようとした³¹。

態度の上でのナチへの忠誠を、直接的・間接的に取り付けようとするこうしたプロパガンダに比べると、ナチズムへの積極的な支持を訴える①のような動きには、全体としては比較的限定的な効果しか見られなかったが、それでもヒトラー崇拜は、大戦末期まで強い求心力を保ち続けたモチーフであった。よく知られているように、ヒトラー暗殺未遂に対してはドイツ国民や兵士たちの幅広い層から憤激が巻き起こったし、45年に入っても兵士たちの間でのヒトラーへの信頼は、揺るぎないものであった³²。また、「奇跡の兵器」による報復や戦局逆転への期待も、ヒトラーの「軍事的才能」への信頼感や空襲への怒りと結びついて、かなりの程度浸透力があつた。さらにM・ガイアーも指摘するように、大戦末期の「崩壊社会」の中で、集団に所属することで生き残りを図ろうとする一種の連帯感がドイツ人の間で醸成され、「民族共同体」観念が強い説得力を持ち得た点も見逃せない³³。

しかし全体としては、ナチ・プロパガンダは戦局が進むにつれて説得力を失いつつあつた。公的に報じられる内容と、前線からの野戦郵便や休暇兵士がもたらす情報、米英軍がばらまくビラやBBCなどによるドイツ語放送³⁴、広まる噂とが矛盾を来すようになり、体制から半ば自律した「非公式の世論市場informeller Meinungsmarkt(F・バヨール)」³⁵が形成されるようになった。その時その時に戦われている前線に国民の関心を集中させることで、西部戦線、東部戦線、イタリアなど多正面で戦われている戦争の全体像を見えにくくさせようとする試みも、軍事的な成功が見込めない状況では効果は乏しかった。

むしろ、大戦末期に指導者層だけでなく、「ふつうの人々」や兵士たちの間でイデオロギーが持っていた積極的な意味を考えるためには、③のような意味でイデオロギー

を捉える必要がある。ガイアーによれば、「物質に対する精神の優越」を強調し、個人的・社会的なモチベーションを高めることが動員や戦闘に不可欠であるという考え方において、第一次大戦以降のドイツ以上に一貫した国はなかった。業績をもたらすのは何よりもまず精神の力であり、まずは個人々がモチベーションを高めて努力し、それを集団への絶対的な帰属意識と融合させることで、軍隊や社会から最大限のエネルギーを引き出さなければならない、というのがナチ体制の考え方であった。個々の動機付けと絶対的な帰属意識とのこうした融合は、集団に属しない人間、属していても戦う意志を見せない人間に対する反感と表裏一体のものであり、これが戦争において致命的な破壊力を生み出した。こうした意味においてドイツの戦争は「世界観戦争」「イデオロギーの戦争」であった、というのがガイアーの主張である³⁶。

ガイアーの議論が実際にどこまで妥当するのかは今後の研究を俟たなければならないが、第二次大戦で亡くなったドイツ兵のうち、44年7月以降の死者が全体の半数以上を占めること、特に45年1月という段階になって45万人以上という、大戦を通じて最悪の数字になっていることは³⁷、こうした意味での「動機付け」「自己動員」という問題抜きに考えることはできない。O・パートフなどが指摘するように、自らを取り巻く環境が過酷になればなるほど、自らの行動を意味づけ、正当化しなければいけないという「解釈の圧力」が強まり、動機付けが「ふつうの人々」や兵士たちにも切実に必要とされたからである³⁸。人種主義や反ユダヤ主義、ヒトラー崇拜や「民族共同体」観念が教化され、あるいは「ネガティブな統合」によって外面的な忠誠をとりつけるという「上から下へ」の動きとしてだけでなくイデオロギーのもつ求心力を考えるためには、物理的な困難を精神的な意味づけによって打開しようとするこうした欲求が、どの程度「ふつうの人々」の間で浸透し、それが大戦末期の体制関与のあり方にどのように作用したのを見る必要がある。

4 暴力の社会化

大戦末期は、ナチ体制の中でも最も「内向きの暴力」に満ちていた時期である。外国人労働者や戦争捕虜、捕まった脱走兵、共産主義者、ユダヤ人、監獄や「教育労働収容所」の囚人などのゲシュタポによる殺害。「人狼部隊Werwolf」による、降伏しようとする市民への脅迫や市長の殺害、「移動即決軍法会議」などによる、脱走や「国防力破壊」の嫌疑をかけられた兵士の処刑。強制収容所からの「死の行進」。そして、連合国軍のパイロットに対するリンチ殺人。

大戦末期の「内向きの暴力」の多くに共通した特徴としてG・パウルが指摘するのが、こうした殺害・暴力行為が必ずしも組織のトップによる個別の命令という手続きを経ることなく、現場の裁量・イニシアチブで行われていたという点である³⁹。ヒムラーからの大枠としての命令は、具体化するにはあまりに包括的かつ抽象的なものであり、実際の殺害や暴力行為に及ぶにあたっては、親衛隊・警察高権指導者や保安警察・保安部の指揮官、地域のゲシュタポ所長や看守・護衛兵たちが、これをどのように解釈し実行に移すのかが、決定的に重要であった。特に45年以降「カストロフ社会」「カオス社会」が現実のものとなり、命令系統が錯綜して相矛盾する命令が届いたりする中で、彼らにはかつてない行動や裁量の余地が生まれた。「内なる敵」への警戒感や人種主義

的な偏見が、治安要員の払底により個々にかかる重い負担や緊張感、連合国による裁判の際に証人となりうる人々を事前に殺害しておこうという「予防措置」的な目論見、彼らが主観的に感じていた報復・蜂起への恐怖、極度の混乱の中でのパニック、あるいは「死なばもろとも」といったような終末論的精神状態なども相まってついに決壊したのがこの時期であったと言える。

こうした急進化をもたらした構造的背景として重要なのが、占領地における経験やその暴力性が様々な形でドイツ本国へと「再輸入(B・ルジネーク)」⁴⁰されたという点である。「戦末期犯罪」の加害者たちの多くが、東部やバルカン半島で、行動部隊や特別部隊として、「パルチザン・匪賊掃討」という「治安行動」の経験の持ち主であった。前線が接近してくると、ドイツ本国のゲシュタポや刑事警察、保安部なども、占領地における警察・親衛隊高権指導者のような自立した強力な権限を持つ指揮官の下へと束ねられ、これが移動行動部隊を組織して次々と「戦末期犯罪」を起こしていった。こうして、東部占領地域というドイツ支配領域の「周辺」で行われていたテロルが本国へとフィードバックされ、猛威を振るったのが、大戦末期という時期であった。

しかしここで忘れられてはならないのは、これらの暴力行為がドイツ社会や「ふつうの人々」とまったく無縁な形で行われたわけではないという点である。「戦末期犯罪」の多くは衆人環視の下、隠蔽されることもなく行われた。パイロットへのリンチ殺人も、扇動したのはナチ党やその地方幹部であったが、加害者の中には刑事警察やゲシュタポだけでなく、一般市民も少なからず含まれていた⁴¹。そもそも大戦末期という時期は、強制収容所システムがかつてなく爆発的に拡張した時期でもあった。ドイツ軍撤退の際の逮捕・連行や、東部で閉鎖された収容所の囚人移送によって、強制収容所の囚人数は1944年夏以降急激に増加していった。深刻な労働力不足からユダヤ人も労働動員の対象とされるようになり、ドイツ本国へと連行された。こうした人々は主に軍需産業か建築へと投入されたが、囚人の多くは周囲から遮断された基幹強制収容所ではなく、都市や村落の内部に点在していた外部収容所(Außenlager)へと収容された。これらの囚人がどのように働かされているか、衛生・食糧状態がどのようなものであるか、人々の目から隠蔽することはもはや不可能となっていた。

それだけでなく、空襲が激化し、彷徨う避難民を目にすることが日常化する中で、暴力の爪痕が前線・「銃後」問わず溢れていったのが、大戦末期のドイツ社会である。そうした状況の中で改めて考える必要があるのが、ガイアーの言う「暴力の社会化」という概念である。確かに暴力を行使するのは国家であり軍隊であるが、社会の側に暴力を行使する用意があつてはじめて戦争遂行は可能になる⁴²。「ふつうの人々」や兵士たちがどのような暴力に晒され、あるいはどのような暴力を自ら行使したのか。人々がそこから受けた無力感、被害者意識が、さらなる弱者に対する暴力の行使やその容認という形で「埋め合わせ」されることはなかったのか⁴³。自分たちに課せられた殺害という「業績への強制」に対して兵士たちがこれをこなしていくことで、自らの強さや優越性が確認されるという、倒錯した「自己確認」(ガイアー)は、この時期にも見られたのか⁴⁴。「暴力の社会化」は提示されて久しい概念であるが、以上のような問いは従来の研究においてほとんど論じられていない。大戦末期のナチ体制の暴力性は、どの程度の裾野の広がりによって下支えされていたのかが明らかにされなければならない。

おわりに

A・クーンツが指摘するように、絶望的な状況の中なぜドイツ軍兵士たちは最後まで耐え抜いたのかという問いに対しては、従来紋切り型の説明が横行しがちであった。いわく、「総統を崇拜していたから」「兵士としての忠誠の誓いを立てていたから」「イデオロギー的な狂信性ゆえ」「即決軍法会議による脅迫ゆえ」など、それ自体必ずしも間違っているわけではないものの、大戦末期のドイツ社会の複雑さを捉えるためには、あまりに単純すぎる概念やステレオタイプの数々である⁴⁵。しかし本稿で見てきたように、大戦末期を単に、党という体制中枢が上から下へと一方的に権力や暴力を貫徹させる時期として見なすのではなく、党、軍隊、社会、そして「ふつうの人々」や兵士たちなど、様々な主体が、各々置かれた状況の中でどのような意図を持ってどのように行動したのか、そのせめぎ合う場として大戦末期を捉えなければ、こうした複雑さを理解することはできない。総力戦体制やポリクラシー、イデオロギー、暴力、いずれの問題領域においても、それが強制という形であれ、何らかの自発性によるものであれ、そこで生きる個々の人々にとってどれほどの拘束力／吸引力をもっていたのかを多角的に見極めることで、「なぜ」に対する答えが臆気ながら見えてくる。大戦末期の戦時社会を研究することの意味は、突き詰めれば、林博史が沖繩戦と日本軍について述べたように、「戦時体制がどれほど深く人々をとらえていたのか、そしてそれがどのようにして崩壊していくのか、戦争に協力しないということがどのようにして可能であり、あるいは不可能なのか」⁴⁶という一文に凝縮されているように思われる。

- 1 アントニー・ビーヴァー、川上汎訳『ベルリン陥落 1945』白水社、2004年（原著：2002年）、29頁。
- 2 参照、芝健介「ヒトラーをめぐる現代ドイツの歴史学」ヨアヒム・フェスト、鈴木直訳『ヒトラー—最後の12日間』岩波書店、2005年（原著：2002年）、213-237頁、特に223頁以下；Henke, Klaus-Dietmar, *Die amerikanische Besatzung Deutschlands*, München, 1995, S.32.
- 3 永岑三千輝「ホロコーストの論理と力学—総力戦敗退過程の弁証法」『横浜市立大学論叢 社会科学系列』55-3（2003年）、265-296頁、286頁。
- 4 Bergen, Doris, *Death Throes and Killing Frenzies: A Response to Hans Mommsen's „The Dissolution of the Third Reich: Crisis Management and Collapse, 1943-1945“*, in: *German Historical Bulletin* 27 (2000), pp.25-37.
- 5 参照、Eley, Geoff, *Hitler's Silent Majority? Conformity and Resistance under the Third Reich (Part One)*, in: *Michigan Quarterly Review* 42(2)(2003), pp.389-425.
- 6 この流れをN・グレゴールは「Voluntarist Turn」と表現している。Gregor, Neil, *Nazism – a Political Religion? Rethinking the Voluntarist Turn*, in: Gregor (ed.), *Nazism, War and Genocide: New Perspectives on the History of the Third Reich*, Exeter, 2005, pp.1-21. 小野寺拓也「歴史研究の「ミクロ過程論的転回」—「ゴールドハーゲン後」のナチズム・ホロコースト研究」『歴史学研究』840（2008年）、19-27頁も併せて参照。
- 7 永岑前掲論文、286頁。
- 8 やや概略的ではあるがほぼ唯一の試みとして、Rusinek, Bernd-A., *Ende des Zweiten Weltkrieges lokal, regional, international. Forschungsstand und Perspektiven*, in: Rusinek (Hg.), *Kriegsende 1945. Verbrechen, Katastrophen, Befreiungen in nationaler und internationaler Perspektive*, Göttingen, 2004, S.7-23.
- 9 例えば、Wehler, Hans-Ulrich, *Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Viertes Band. Vom Beginn des Ersten*

- Weltkriegs bis zur Gründung der beiden deutschen Staaten 1914-1949*, München, 2003, S.793f, 690; Mommsen, Hans, Nationalsozialismus als vorgetäuschte Modernisierung, in: Pehle, Walter H. (Hg.), *Der historische Ort des Nationalsozialismus. Annäherungen*, Frankfurt a.M., 1990, S.31-46.
- 10 Süß, Steuerung durch Information? Joseph Goebbels als „Kommissar der Heimatfront“ und die Reichsinspektion für den zivilen Luftschutz, in: Hachtmann, Rüdiger/ Süß (Hg.), *Hitlers Kommissare. Sondergewalten in der nationalsozialistischen Diktatur*, Göttingen, 2006, S.183-206.
- 11 Koehl, Robert, Feudal Aspects of National Socialism, in: *American Political Science Review* 56(4) (1960), pp.921-933, p.927.
- 12 Gotto, Bernhard, Polykratische Selbststabilisierung. Mittel- und Unterinstanzen in der NS-Diktatur, in: Hachtmann/ Süß (Hg.), *a.a.O.*, S.28-50, S.39.
- 13 Fings, Karola, Sklaven für die „Heimatfront“. Kriegsgesellschaft und Konzentrationslager, in: Echternkamp, Jörg (Hg.), *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg. Bd.9/1. Die deutsche Kriegsgesellschaft 1939 bis 1945. Politisierung, Vernichtung, Überleben*, München, 2004, S.195-271, S.197ff; Gotto, Kommunale Krisenbewältigung, in: Süß (Hg.), *Deutschland im Luftkrieg. Geschichte und Erinnerung*, München, 2007, S.41-56, S.51f. 以下も参照、ロバート・ジェラテリ、根岸隆夫訳「ヒトラーを支持したドイツ国民」みすず書房、2008年(原著:2001年)、254-255頁。
- 14 Gotto, Polykratische Selbststabilisierung, S.42ff.
- 15 Ebd., S.39; Blank, Ralf, Kriegsalltag und Luftkrieg an der „Heimatfront“, in: Echternkamp (Hg.), *a.a.O.*, S.357-461, S.384. これとは対照的な議論として、Gregor, A Schicksalgemeinschaft? Allied Bombing, Civilian Morale, and Social Dissolution in Nuremberg, 1942-1945, in: *The Historical Journal* 43(4) (2000), pp.1051-1070.
- 16 Gotto, Polykratische Selbststabilisierung, S.48, 36; Gotto, Dem Gauleiter entgegen arbeiten? Überlegungen zur Reichweite eines Deutungsmuster, in: John, Jürgen et al. (Hg.), *Die NS-Gaue. Regionale Mittelinstanzen im zentralistischen "Führerstaat"*, München, 2007, S.80-99, S.97ff.
- 17 例えば、Thamer, Hans-Ulrich, Die Erosion einer Säule. Wehrmacht und NSDAP, in: Müller, Rolf-Dieter/ Volkman, Hans-Erich (Hg.), *Die Wehrmacht. Mythos und Realität*, München, 1999, S.420-435; Mommsen, The Dissolution of the Third Reich: Crisis Management and Collapse, 1943-1945, in: *Bulletin of the German Historical Institute* 27 (fall 2000), pp.9-23.
- 18 Yelton, David K., „Ein Volk steht auf“: The German Volkssturm and Nazi Strategy 1944-1945, in: *Journal of Military History* 64(2000), pp.1061-1083.
- 19 Förster, Jürgen, Geistige Kriegsführung in Deutschland 1919 bis 1945, in: Echternkamp (Hg.), *a.a.O.*, S.469-640, S.590.
- 20 Messerschmidt, Manfred, *Die Wehrmacht im NS-Staat: Zeit der Indoktrination*, Hamburg, 1969.
- 21 芝健介は、「ヒトラーの意志の徹底的貫徹が見られる」という点において、大戦後半期が比較的「意図派」の主張が妥当する時期である、と述べている。芝前掲論文、224頁。
- 22 ゲッベルス自身による Stimmung と Haltung の区別については、Kallis, Aristotle A., *Nazi Propaganda and the Second World War*, Hampshire/ New York, 2005, p.4.
- 23 Kunz, Andreas, Die Wehrmacht 1944/45: Eine Armee in Untergang, in: Müller (Hg.), *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg. Bd.10/2. Der Zusammenbruch des Deutschen Reiches 1945. Die Folgen des Zweiten Weltkrieges*, München, 2008, S.3-54, S.11f; Gotto, Polykratische Selbststabilisierung, S.49; Geyer, Michael, War, Genocide, Extermination: The War against the Jews in an Era of World Wars, in: Jarausch, Konrad H./ Geyer (ed.), *Shattered Past. Reconstructing German Histories*, Princeton, 2003, pp.111-148, pp.120f, 135ff.
- 24 Kallis, *op.cit.*, p.153.
- 25 Kundrus, Birthe, Totale Unterhaltung? Die kulturelle Kriegsführung 1939 bis 1945 in Film, Rundfunk und Theater, in: Echternkamp (Hg.), *Das Deutsche Reich und der Zweite Weltkrieg. Bd.9/2. Die deutsche Kriegsgesellschaft 1939 bis 1945 Ausbeutungen, Deutungen, Ausgrenzung*, München, 2005, S.93-157, S.97.

- 26 Kallis, *op.cit.*, p.92.
- 27 Vieth, Eva, Die letzte „Volksgemeinschaft“ – das Kriegsende in den Bildern einer deutschen Illustrierten, in: Hillmann, Jörg/ Zimmermann, John (Hg.), *Kriegsende 1945 in Deutschland*, München, 2002, S.265-285, S.276f; Kallis, *op.cit.*, p.171. しかしカリスも指摘するように、こうした恐怖キャンペーンは相対的に英米軍への恐怖感・敵愾心を和らげ、結果として西部戦線での人々の抗戦意欲を萎えさせるという逆効果があった。Kallis, *op.cit.*, p.90.
- 28 Kundrus, a.a.O., S.95.
- 29 Ebd., S.153.
- 30 例えば、ベルリンの映画館は45年1月時点で32,000席分の収容力があったが、これは43年のピーク時と比べても、20%弱程度の減少に留まっていた。Kallis, *op.cit.*, p.215.
- 31 Vieth, a.a.O.
- 32 米英軍によるドイツ兵捕虜への尋問では、「ヒトラーを信頼するか」という質問に対して、1945年1月の時点で62%が「ヤー」と回答した。3月になるとこの比率は大幅に低下するが、それでも3月初めで31%、月末にはいまだ21%が「ヤー」回答であった。Zagovec, Rafael A., Gespräche mit der „Volksgemeinschaft“. Die deutsche Kriegsgesellschaft im Spiegel westalliiertter Frontverhöre, in: Echternkamp (Hg.), *a.a.O.* (註25), S.289-381, S.358.
- 33 Geyer, „Endkampf“ 1918 und 1945. German Nationalism, Annihilation, and Self-Destruction, in: Lütke, Alf/ Weisbrod, Bernd (ed.), *No Man's Land of Violence. Extreme Wars in the 20th Century*, Göttingen, 2006, pp.35-67, pp.63ff.
- 34 E・ジョンソンなどによる1993年時点でのアンケート調査によれば、回答者の53%が戦時中に外国の放送を聴いていた。Johnson, Eric A., *Nazi Terror. The Gestapo, Jews and Ordinary Germans*, New York, 1999, p.258. 322頁以降も併せて参照。
- 35 Bajohr, Frank, Hamburg – Der Zerfall der „Volksgemeinschaft“, in: Herbert, Ulrich/ Schildt, Axel (Hg.), *Kriegsende in Europa. Vom Beginn des deutschen Machtzerfalls bis zur Stabilisierung der Nachkriegsordnung 1944-1948*, Essen, 1998, S.318-336, S.321.
- 36 Geyer, War, Genocide, Extermination, pp.135ff.
- 37 Overmans, Rüdiger, *Deutsche militärische Verluste im Zweiten Weltkrieg*, 2. Auflage München, 2000, S.238f.
- 38 Bartov, Omer, Extremfälle der Normalität und die Normalität des Außergewöhnlichen: Deutsche Soldaten an der Ostfront, in: Borsdorf, Ulrich/ Jamin, Mathilde (Hg.), *Über Leben im Krieg. Kriegserfahrungen in einer Industrieregion 1939-1945*, Reinbek bei Hamburg, 1989, S.148-161, S.155; Zagovec, a.a.O., S.369.
- 39 Paul, Gerhard, „Diese Erschießungen haben mich innerlich gar nicht mehr berührt.“ Die Kriegsendphasenverbrechen der Gestapo 1944/45, in: Paul/ Mallmann, Klaus-Michael (Hg.), *Die Gestapo im Zweiten Weltkrieg. „Heimatfront“ und besetztes Europa*, Darmstadt, 2000, S.543-568, S.545.
- 40 Rusinek, a.a.O., S.10.
- 41 Grimm, Barbara, Lynchmorde an alliierten Fliegern im Zweiten Weltkrieg, in: Süß (Hg.), *a.a.O.*, S.71-84, S.80ff.
- 42 Geyer, Krieg als Gesellschaftspolitik. Anmerkungen zu neueren Arbeiten über das Dritte Reich im Zweiten Weltkrieg, in: *Archiv für Sozialgeschichte* 26(1986), S.557-601, S.558.
- 43 参照、小野寺拓也「ふつうのドイツ兵とナチ・イデオロギーの関係をめぐって—第二次大戦末期の一兵士の野戦郵便より」『現代史研究』52(2006年)、41-55頁、特に53頁。
- 44 Geyer, Das Stigma der Gewalt und das Problem der nationalen Identität in Deutschland, in: Jansen, Christian et al.(Hg.) *Von der Aufgabe der Freiheit. Politische Verantwortung und bürgerliche Gemeinschaft im 19. und 20. Jahrhundert*, Berlin, 1995, S.673-698, S.690.
- 45 Kunz, a.a.O., S.3f.
- 46 林博史『沖縄戦と民衆』大月書店、2001年、8頁。

“Das wahre Gesicht“ zeigt sich in der kritischen Situation. Neuere Forschungen über deutsche Gesellschaft und Wehrmacht in der Endphase des Zweiten Weltkriegs.

Takuya Onodera

„Was das Wesen der politischen Führer und des Systems in seiner nackten Wahrheit darstellt, ist die Formen ihres Untergangs“. (Anthony Beevor)

In diesem Satz verdichtet sich die Quintessenz von Interessen, die neuere Forschungen über die Endphase des Zweiten Weltkriegs gezeigt haben. In dieser Phase drängen sich die Alliierten an „Altreich“ von beiden Fronten heran, und Luftkrieg intensiviert sich noch heftiger, dadurch wird die Trennlinie zwischen Front und „Heimatfront“ unklar. Propagandistische Indoktrination und totale Mobilisierung der Gesellschaft verstärken sich, und „Terror gegen Innen“ wie „Fliegendes Standgerichte“ oder „Kriegsendphasenverbrechen“ durch Gestapo radikalisiert sich sehr stark. Neuere Forschungen, vor allem seit 21. Jahrhundert, versuchen, diese Destruktivität nicht als Ausnahmerecheinung in der extremen Situation, sondern als das Wesen der nationalsozialistischen Herrschaft zu betrachten, und als solches zu analysieren. Und danach zu fragen, warum die Wehrmachtsoldaten trotz der hoffnungslosen militärischen Aussicht bis zum Ende gekämpft haben, oder zumindest durchgehalten haben, nicht wie 1918, und warum die „ganz normale Leute“ fast bis zum Ende Hitler gefolgt haben, ermöglicht es, „Zwang und Konsens“ in der nationalsozialistischen Herrschaft sozialgeschichtlich, alltagsgeschichtlich und erfahrungsgeschichtlich genauer zu verstehen.

Aus diesem Problembewußtsein erörte ich die deutsche Gesellschaft und die Wehrmacht in der Endphase des Zweiten Weltkrieges aus folgenden vier Standpunkten; 1. *die Beziehung zwischen das System des totalen Kriegs und polykratische Herrschaft*, 2. *die Beziehung zwischen NSDAP und Wehrmacht*, 3. *„Ideologie“ in der NS-Herrschaft*, 4. *„Vergesellschaftung der Gewalt“*.